

幸いなるかな、悲しむ者

主イエスの山上の説教は「心の貧しい人々は幸いである」という逆説的な言葉から始まる。主イエスは神の民の特性としてのこの「心の貧しさ」を語った後、第2の特性としての「悲しみ」について語り、「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰めらる」と言われた（マタイ5：4）。何故、悲しむことが「幸い」だといわれるのであろうか。その悲しみは、何の悲しみであらうか。

人は自分の心身の弱さや病気や種々の障害に泣き、事業の失敗や結婚の破綻に泣き、突然襲ってくる不運や逆境や不幸に泣く。この世は様々な悲しみで満ちている。しかし、主イエスが「悲しんでいる人々は幸いである」と言われたとき、その悲しみとは、必ずしもそのような、不幸や不運や逆境を悲しむ悲しみではない。それはまず、神との関係における「悲しみ」であり、バークレーがいみじくも指摘しているように、「自分の罪と無価値を、絶望するほど悲しむ」悲しみなのである。

聖書は、そのような罪の悲しみを嘆く人の姿を繰り返し描いてみせてくれる。主が言われた悲しみとは、自分が神の前に愚かであつまらないものであるだけでなく、あのルカ福音書第18章に出て来る「徴税人」の譬えのように、神の前に立つことの出来ない罪深い、みじめな存在であることを悟った者の深い悲しみである。存在の深みにおいて、自分はどのような人間、愚かで、醜く、救いがたいほど罪だらけの存在であることを嘆く、そのような悲しみである。

詩編32編において、ダビデは聖なる神の前に、その犯した罪の恐ろしさを悟り「ひねもす苦しみをうめいた」とある。罪の赦しを求める魂の絶望的な叫びがそこに見られる。ペトロもそうであった。主イエスが十字架にかかれる最後の晩、自分の命を守るために三度も主を否んだ。その時鳴いた鶏の声に、主を裏切った自分の恐ろしい罪を暴露され、自分の浅ましさを、愚かさ、罪深さ、醜さを、いやと言う程示され「外に出て激しく泣いた」。泣きに泣いた！（ルカ22：63）。また、使徒パウロも「わたしは、何とというみじめな人間なのだろう。誰が、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか！」と絶望的な叫びを上げた（ローマ7：24）。

主イエスが言われた<悲しみ>とは、そのようなく悲しみ>である。人間性の存在の深みにおける罪の自覚から出て来る悲しみである。悲しみの人とはそういう人のことである。そのような罪に泣く、悲しめる魂を慰める者は誰か？ 誰が私たちに慰めてくれるのか。それはキリスト以外にない。そのような人は慰められる、と宣言して下さったお方、すなわち、十字架にかかって死んで下さったお方、キリスト以外にない。

主イエスは、私たちの悲しみを背負われて十字架の道を歩まれた。そして十字架において悲しみの根源である私たちの罪を贖って下さった。私たちの罪のためにはすでにキリストの血が流された！ “悲しんでいる人たちは幸いだ、さあ、わたしのもとに来なさい、わたしがあなた方を休ませてあげよう”と語って下さるお方がそこにおられる。その十字架の主を見上げるときそこに私たちは真の慰めを見出すのである。イエス・キリストこそ、悲しみを“幸い”に変えて下さるお方なのである。この方以外にないのである。